

# 立命館大学の課外活動団体による 小学校児童交流システムの構築

——地域交流の事前研修プログラムの開発と地域交流コーディネーターの養成

北波 正衛 (学生オフィス[BKC]課長補佐)

伊藤 昭 (大学行政研究・研修  
センター専任研究員)

本村 廣司 (学生部次長)

越智 裕 (学生オフィス[BKC]課長)

## I. 研究の背景

1. 社会的背景と立命館学園の目指す人材育成
2. 立命館大学びわこ・くさつキャンパスのキャンパスコンセプト
3. 地元との連携

## II. 研究の目的

1. 本学課外団体に対する「地域交流事前研修プログラム」の開発
2. 「地域交流コーディネーター」の養成

## III. 研究の方法

### IV. 調査報告

1. 課外団体へのアンケート調査
2. 小学校へのヒアリング調査
3. 他大学における事例調査
4. 地域交流の事例調査（地元で行われた課外自主活動団体と地域交流の実例）
5. 調査報告から見える現状と課題

## V. 政策立案について

1. 「地域交流事前研修プログラム」の提案
2. 「地域交流コーディネーター養成プログラム」

## VI. 研究のまとめ

1. 豊かな人間性を持った児童の育成
2. 学生の成長
3. 立命館大学学生部の課外プログラムづくりの意義

## VII. 残された課題

1. プログラム案のブラッシュアップと試行
2. 草津市との連携強化
3. インセンティブ付与の検討
4. 立命館アジア太平洋大学（APU）との連携の検討

## VIII. 今後の計画

## IX. おわりに

## I. 研究の背景

### 1. 社会的背景と立命館学園の目指す人材育成

少子化などわが国の社会的背景から、大学への全入時代到来が叫ばれ、大学においては、人間性の豊かな学生の育成や、多様な学生の目線に立った支援・サービスの必要性が求められている。一方で、子ども・児童に対する学びや成長、安心・安全な環境について、地域社会をあげた取り組みが重要性を増してきている。そして、文部科学省、厚生労働省や経済産業省など行政が進める教育・雇用・産業政策の中では、「意欲ある学生への支援」、「自立し挑戦する若者の育成」、「社会人基礎力の醸成」

や、「新たな社会的ニーズのための学生支援プログラム」など、大学生に対する取り組みが生まれている。

また、小学校や児童に対しては、生きる力と主体的に学ぶ力をつけるための「総合的な学習の時間」の導入、「確かな学力」、「理数系大好き事業」の推進、また、「地域の教育力向上」として、市町村との連携による「放課後対策事業」などを施策に掲げ、教育改革の新たな事業を拡充し、予算確保の上推進がなされている。

一方、立命館学園では、2006年7月に「立命館憲章」を制定した。

この中で、「立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて、信頼と連帯を育み、地域に根ざし、

国際社会に開かれた学園づくりを進める」とあり、その教育にあたっては、「建学の精神や教学理念に基づき、“未来を信じ、未来に生きる”の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理を持った地球市民として活躍する人間の育成に努める」としている。

## 2. 立命館大学びわこ・くさつキャンパスのキャンパスコンセプト

立命館大学は、京都市に「衣笠キャンパス」と「朱雀キャンパス」、そして、滋賀県草津市に「びわこ・くさつキャンパス」(以下、BKC)という3つのキャンパスを有し、約35,000名の学生・大学院生がこれらのキャンパスで学んでいる。その内、BKCは、経済学部、経営学部、そして、理工学部、情報理工学部という2つの理工系学部と、大学院4研究科をあわせて、約17,000人の学生が所属している。(なお、2008年4月より、生命科学部・薬学部の開設を予定している。)

このキャンパスの特徴は、9,000名に上る理工系学生と8,000名の社系学生が学んでいることから、キャンパスコンセプトとしては、国際水準の「文理融合型キャンパス」の創造を目指し、常に新しい教育研究システムの開発に努めるとしている。さらに、もう一つのキャンパスコンセプトは、地元への積極的な貢献である。同キャンパス開設の際に多大な協力をいただいた、滋賀県や草津市などへ、学生による地域行事などでの積極的な交流や、本学理工系の知的財産を活かした産官学連携事業の促進を進め、2005年には、本学と滋賀県草津市との間で包括協定を締結している。

その環境の下、正課外でも、このキャンパスの学生たちはさまざまな活動を繰り広げている。スポーツ系はもとより、多様な領域の学術系団体や、理工系学部にある学科の特徴を活かして生まれた団体が、学園祭など学内行事に留まらず、学外でも活発に活動を展開している。また、これら課外自主活動に対して、立命館大学学生部(以下、学生部)は、顧問の配置など人的な支援、遠征や研修活動に活用できる財政制度の運用や、学内にある施設利用の貸与・管理を行っている。

## 3. 地元との連携

ここ数年来、本学の課外自主活動団体(以下、課外団体)は、地域交流・地域貢献活動を積極的に行ってきた

いる(表1)。

その中でも、BKCに拠点を置く課外団体が行う地域交流の対象先として、地元の小学校(もしくは中学校)への指導・交流を実施した団体は数多い(表2)。また、継続している例としては、「立命の家」という、理工系を中心としたいくつかの課外団体が、2001年度より近隣の小学生の希望者を対象に、体験的なプログラムを提供するイベントを、毎年夏休みに行っている。

一方で、これら多くの地域交流のほとんどが1回だけの依頼であり、その後継続した交流や取り組みは数少ない。

地域からは、現状からさらに実りのある、持続的な本学と地元の小学校との交流を、毎年の恒例行事、もしくは半年ないし1学期間のような一定期間の交流を続けられることが望まれている。また、この取り組みを「課外団体」という組織として進め、後輩に継承していけば、単なる一時的な交流ではなく、継続的な地域との交流が実現可能となり、一人でも多くの学生が交流を行うことで、学生の成長とともに、地域貢献への意識向上につながられる。

本研究を進めるにあたっては、地元自治体や地元の小学校との密接な連携関係が必要不可欠と考えられる。ついでには、本学と包括協定を締結している滋賀県草津市において、同市内の13の小学校との交流推進が対象と想定される。そのため、実施体制はBKCを拠点に、学生部[学生オフィス(BKC)]の取組みとなる。

本研究の成果が実際に地元への展開を図れれば、教育改革への寄与と、地域へ貢献する新たな取り組みとしても非常に有効であると考えられる。

表1 立命館大学びわこ・くさつキャンパス拠点の課外自主活動団体・地区別地域交流実績(件)

	2006年度実績	割合	備考
滋賀県	183	85.9%	【参考】草津市=104件、大津市=46件
京都府・その他	30	14.1%	【参考】京都市=21件
合計	213	***	

※出典：立命館大学学生部

表2 小学校と交流実績のある立命館大学課外自主活動団体

<p>《スポーツ系》</p> <p>アメリカンフットボール部、男子陸上競技部、男子バスケットボール部、相撲部、卓球部、NEXUS 他</p> <p>《文化・芸術系サークル》</p> <p>応援団チアリーダー部、吹奏楽部、飛行機研究会、ロボット技術研究会、内燃機関研究会、EV-Racing、情報理工学部PJ団体、RCC（コンピュタークラブ）、草津天文研究会、ライフサイエンス研究会、ESS、数学研究会、物理科学研究会、Rits-BBS、バトントワリング部 他</p>
---

※出典：立命館大学学生部

## II. 研究の目的

### 1. 本学課外団体に対する、「地域交流事前研修プログラム」の開発

本研究では、課外自主活動に参加している本学学生・団体が、小学校の児童クラブへの企画提案や参画を実施する上で、必要なスキルを身につけるための課外プログラムの研究開発を行う。

本学の理工系、スポーツ系や文化・芸術分野の課外団体が、彼らの持つ活動目的や特徴を児童クラブの時間帯に発揮するために、地域の小学生に体験や学びを与える有効なスキルである「コミュニケーション力」や「プレゼンテーション力」をはじめ、地元地域と本学のつながりや小学校における安全などの知識を備えるための、「地域交流事前研修プログラム」を開発する。これにより、小学生とともに、心豊かな個性あふれる学生個人としての成長と、これに取り組む団体の組織力・結束力の向上を目標とするプログラムとしたい。

### 2. 「地域交流コーディネーター」の養成

実際に小学校で繰り返される児童クラブや放課後の企画を、それぞれの課外団体と、小学校や地元自治体と団体とを取り次ぐ学生スタッフとして、「地域交流コーディネーター」を養成する。

このコーディネーターは、地元小学校側のニーズと課外団体とをとりまとめ、この交流を実現する役割である。ついで、小学校や地元自治体など学外機関と課外団体とを取り持つ場合に必要なマナー、渉外力、いろいろな交

流形態の提案・企画力や、課題に対する解決能力を養い、自立的・創造的で社会に貢献できる人材の育成を目指す。

## III 研究の方法

本研究の方法は、小学校での児童クラブの現状を、市内小学校へのヒアリング調査をすることにより、現在の児童クラブの状況や課題、大学に対するニーズ把握を行う。また、大変重要である本学の課外団体へアンケート調査を行い、小学校・児童との交流にあたっての取り組みや課題、交流の継続の可能性について調べる。さらに、国内の他大学における事例調査も行い、プログラム開発への検討につなげる。

### 1. 課外団体へのアンケート調査

「立命の家」などのイベントや、課外団体独自で地域交流をすでに実施している課外団体と、今後交流が期待できる課外団体を抽出し、部員である学生へアンケート調査を行う。学生側から見た小学校・児童との交流と、それに関わることで学生自身が感じたことや課題意識などを探る。

### 2. 小学校へのヒアリング調査

地元である滋賀県草津市内のすべての小学校を対象に、教員へのヒアリング調査を実施する。

小学校での児童クラブの現状や課題、大学へ求めるものなどを、直接教員へヒアリングし実態を調査する。

### 3. 他大学における事例調査

他大学等における先行事例を、訪問の上、ヒアリング調査を行う。

- ①大阪教育大学（「スタディ・アフター・スクール」）
- ②神戸女子大学（「スクール・サポーター」など）
- ③早稲田大学（「ワセダクラブ・アフタースクール」）ほか

### 4. 地域交流の事例調査（地元で行われる課外自主活動団体と地域交流の実例）

実際に継続交流を行っている課外団体と児童との交流について事例調査を行い、現場の様子とそれらに携わる学生たちの姿や課題などを明らかにする。

## IV 調査報告

### 1. 課外団体へのアンケート調査

- (1) 調査期間 2007年7月～9月
- (2) 調査対象 小学校との交流をしたことのある、または今後交流が期待できる課外団体
- (3) 回収数 13団体/87名（表3）
- (4) 調査方法 アンケートによる調査
- (5) 質問項目
  - ①これまでに小学生、小学校と関わる交流活動を行ったことがあるか
  - ②具体的にどのような交流を行ったか
  - ③交流は団体の活動にとって有益であったか
  - ④小学生との交流を通じて、団体として、部員として得たものはなにか
  - ⑤交流を通じて感じた団体の課題とはなにか
  - ⑥交流にあたって、どのようなスキルが必要と思うか
  - ⑦今後も交流活動を希望するか
  - ⑧（交流できる場合）団体としてどのようなことができるか
  - ⑨交流活動を行う際、一定期間（定期的）継続して行うことができるか
  - ⑩団体の中に教員志望の部員はいるか

(6) 表3 調査団体一覧

No.	調査対象団体	回答者数
1	R.C.C. (立命館コンピュタークラブ)	5
2	ライフサイエンス研究会	5
3	E.S.S. (英語研究会)	6
4	草津天文研究会	10
5	EV-Racing (理工学部プロジェクト団体・ソーラーカーサークル)	3
6	飛行機研究会 (理工学部プロジェクト団体)	9
7	ロボット技術研究会 (理工学部プロジェクト団体)	10
8	Ri-one (情報理工学部プロジェクト団体・ロボカップ・シミュレーション部門)	6
9	書道部	10
10	バトントワリング部	6
11	けん玉研究会	3
12	R.D.C. (ダンス)	10
13	Fusion Of Gambit (ダブルダッチ)	4
	合計	87

### (7) 調査結果の特徴

①交流は団体の活動にとって有益であったか（表4）  
「有益である」と回答した学生は、71%であり、多くの学生が有益を感じている。

また、その理由については、「自分たちの活動の普及・還元や広報」が多く、「教えることのむずかしさの体験」や「子供との接し方の体験」などが挙げられていた。

表4 【課外団体アンケート】交流は団体の活動にとって有益であったか

	回答数	%
有益であった	62	71.3
有益ではなかった	4	4.6
無回答	21	24.1

### ②交流を通じて「団体」として得たもの（表5）

回答で多かったものは、「地域・児童との交流」、「団体としての団結・協調」、「活動内容の普及・広報」の順であった。特徴的なのは、「ダンスの楽しさを伝えることができた」(R.D.C.) や、「けん玉の魅力を広めることができた」(けん玉研究会) というコメントがあり、自分たちの活動の普及や広報の重要性考えている団体や学生が多いことがわかった。

表5 【課外団体アンケート】交流を通じて「団体」として得たもの

回 答	回答数	%
活動内容の普及・広報、知名度向上	22	25.3
地域との交流の実現	21	24.1
団体としての力量(団結力・協調性・企画力)	15	17.3
その他	11	12.6
無回答	18	20.7

### ③交流を通じて個人として得たもの（表6）

個人として、児童との交流の中から得たものとして多かったのは、「交流の経験、児童との交流」「指導力の向上」、「コミュニケーション力、児童との対応力」「教えることの難しさ」「自分たちの活動の再理解」という回答であった。児童はもとより小学校教員や児童の保護者など世代が違う相手との会話や指導、さらに、教えることの難しさを感じたとともに、教える中で自分たちの活

動を見つめなおす機会となっているようだ。

表6 【課外団体アンケート】交流を通じて個人として得たもの

回 答	回答数	%
交流の経験、児童との交流	25	28.7
指導力の向上	12	13.8
コミュニケーション力、児童との対応力	11	12.6
教えることの難しさ	8	9.2
自分たちの活動の再理解	5	5.8
その他	8	9.2
無回答	18	20.7

④交流にあたって、どのようなスキルが必要と思うか（表7）

小学校で児童と交流するにあたり、個人としてどのようなスキルが必要と考えているかは、「プレゼンテーション力」「コミュニケーション力」「児童との対応力」「交流企画への工夫」などが多かった。

「交流を通じて個人として得たもの」の回答の上位に挙げられた項目に対して、スキルアップの必要性を感じていると思われる。また、団体としての課題に通じるものとして、交流に望む際の準備、工夫や企画を進行する力量も必要と感じているようだ。

表7 【課外団体アンケート】交流にあたってどのようなスキルが必要と思うか（複数回答）

回 答	回答数	%
プレゼンテーション力	13	14.9
コミュニケーション力	11	12.6
児童との対応力	11	12.6
交流企画への準備・工夫	10	11.5
元気良さ、気持ち	5	5.8
忍耐力・体力	4	4.6
会議・企画を進行する力	3	3.5
特になし	3	3.5
その他	8	3.5
無回答	20	23.0

⑤交流活動を行う際、一定期間（定期的）継続して行うことができるか（表8）

小学校との継続交流の可能性については、「継続交流

は可能」と答えた学生は30人（34.5%）、「単発での交流は可能」と答えた学生は、22名（25.3%）であった。一方で「継続交流は難しい」という回答をした学生は15名（17.2%）であった。これらの回答の中でも、同一団体の部員間でも意見が違う場合もあった。

表8 【課外団体アンケート】交流活動を一定期間（定期的に）継続して行うことができるか

	回答数	%
継続交流は可能	30	34.5
単発での交流は可能	22	25.3
継続交流は難しい	15	17.2
無回答	20	23.0

（8）課外団体へのアンケート結果から見た傾向

①交流を通じて、学生自身が成長した点ならびに課題と感じていること

学生たちは、児童への交流を通じて成長したと思う項目である、「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」、「指導力」や「企画力」などが、同時に課題として感じていることがわかった。これらの項目を、学園として支援できるプログラムが提供できれば、学生の成長につながるとともに、より充実した地域交流への展開が期待できる。

②継続的な交流の可能性について

調査前の予想に反し、継続交流は可能と回答した学生が多かった。年間活動計画や受講状況から時間的な制約があるなどハードルはあるが、明るい材料となりうる結果だ。

## 2. 小学校へのヒアリング調査

- (1) 調査期間 2007年7月～9月
- (2) 調査対象 草津市内に所在する全小学校（13校）（図1参照）
- (3) 調査方法 学生オフィス（BKC）職員による各校訪問・ヒアリング調査
- (4) 質問項目 ①児童数、②教職員数、③クラブの位置づけ、④実施曜日・時限と長期休暇の実施、⑤加入できる学年、⑥クラブの加入方法、⑦種目および指導者の有無、⑧今後、小学校として取り組みた

いもの、⑨課題、問題、⑩地域との関  
わりの現状、⑪大学生との交流につ  
いての可能性・希望、⑫本学への要望

(5) 調査結果の特徴

①児童クラブにおける課題・問題点 (表9)

小学校において、従事時間、指導体制、活動場所がい  
ずれも限られているという現状を、課題・問題点として  
挙げられているのがわかった。

表9 【小学校へのヒアリング調査】児童クラブにお  
ける課題・問題点

A校	クラブに割く時間が限られる
B校	月2回・60分では、本格的に行うには不十分
C校	場所の限界、指導者が専門でない、予算僅少、 児童の希望優先だと数に偏り発生
D校	3年生以下の担任は下校指導があるため従事で きない
E校	活動場所が狭い、指導者が足りない
F校	活動場所が狭い
G校	時間の確保が難しく、指導に取り組めない
H校	委員会活動と交互のため時間が少ないこと、指 導が十分でなくなる
I校	児童クラブでの交流を望む
J校	教員の数の不足、クラブ数も増やせない
K校	教員、活動場所とも足りない
L校	指導体制の薄さ
M校	時間と場所の確保 (特に運動系クラブ)、活動場 所が限られている



図1 【小学校へのヒアリング調査】草津市内小学校の位置

②学生との交流について (表10)

学生との交流の希望については、希望するとの回答が  
ほとんどであった。

表10 【小学校へのヒアリング調査】学生との交流の  
可能性について

A校	交流希望。クラブ・授業・社会教育活動など、 どれでも交流可能です
B校	交流希望。子供たちの思いが伝わり楽しさが実 感できます
C校	交流希望。手本を見せて、子供たちのやる気を 起こさせてください
D校	交流希望。球技など技術や楽しいゲームなどを 教えてもらおう
E校	交流希望。一緒に活動する、対戦相手としてや、 担当教師とともに準備や後始末をしてもらおう
F校	交流希望。どのクラブもOK
G校	交流希望。施設などの具体的検討要
H校	交流希望。
I校	交流希望。指導補助をしてほしい (けがなどの 対応もできればありがたい)
J校	交流希望。教員が不慣れな協議のサポート
K校	交流希望。指導者として関わっていただき、地 元の公民館との連携ができればよい
L校	交流希望。指導者としてきてほしい。子供が喜 びます
M校	回答なし

③今後取り組みたいことについて (表11)

今後取り組みたいクラブ・分野は、現状では新規開設  
は難しいという回答が多かった。

表11 【小学校へのヒアリング調査】今後取り組みた  
いクラブ・分野について

A校	教職員数から現状は難しい
B校	教職員数から現状は難しい
C校	未記入
D校	未記入
E校	未記入
F校	教職員数から現状は難しい
G校	教職員数から現状は難しい
H校	理科実験・音楽のクラブを復活させたい

I校	未記入
J校	すもうクラブを立ち上げたいが人気がない
K校	礼儀作法を教えるクラブ
L校	未記入
M校	教職員数から現状は難しい

#### （6）小学校へのヒアリング結果から見た現状

小学校における児童クラブに対する現状は、教員の指導体制ならびに従事する時間、活動場所が大変限られていることがわかった。また、クラブ活動での技術や知識などの専門性を持って指導ができない場合があるようだ。学生（課外団体）との交流については、それらの現状からか、交流希望の小学校がほとんどであった。については、地元地域の小学校では、児童クラブでの学生との交流ニーズは高いが、教員の時間的な制約や、大学へのアプローチ・連絡方法がわからないなどの事情から、実現が困難な状況にあると推測される。

### 3. 他大学における事例調査

他大学で実施されている学生や課外団体による小学校との交流について、先行事例の調査を、実際に現地を訪問し、ヒアリング調査を実施した。その内、以下の調査事例について特徴を述べる。

#### （1）大阪教育大学

大阪教育大学では、地元・大阪府柏原市において進めていた学校サポート活動や学校ボランティア活動などの地域交流活動を活かし、柏原市長および教育委員会などとの強い協力体制のもと、平成17年度より「スタディ・アフター・スクール」(SAS) と称した、児童への学習補助を行う活動が立ち上がった。そして同大学は、この活動を基幹プロジェクトとして、2006年度文部科学省現代GPへ「地域連携学校教育のできる教員養成 ——地域に愛着を持ち地域に根ざした子どもを育成できる教員養成プロジェクト——」というテーマで申請し、採択をされている。

この取り組みでの特徴は、同大学の約50名の学生たちが、児童への指導内容や現場の運営までを行う自立的な活動であること、また、このプロジェクト自体が柏原市の重点施策であり、携わっている学生への謝金などが予算化されていることなど、地域との密接な連携により運営されている点である。

#### （2）神戸女子大学

財団法人神戸FCが開講しているサッカースクールへ、神戸女子大学のサークル「ゴーゴーキッカーズ」が、週4～5日活動支援を行っているケースなど、同大学では、課外団体による継続的な地域との交流が積極的に展開されている。また、2007年度より、大学と自治体、地域団体と共同で行う地域活動、ゼミ単位やクラブ単位で行う地域交流であれば単位認定される「地域学習」という科目が開講されたり、神戸市の「学校観察実習」という科目を設置、教員を目指した学生の育成に役立てている。これらは5年前より開始し、毎年約100名の学生が対象校に赴き、授業補助などの支援を行っている。

#### （3）他大学調査での特徴点

今回の現地調査の大きな特徴の一つは、地元自治体のバックアップが強い点であった。現場での支援や評価体制、事業予算化などが自治体と連携して作られており、従事する学生たちを取り巻く良い環境が作られている。

さらに、もっとも印象的であったのは、神戸女子大学からのアドバイスとして、小学校などへ派遣するにあたり、学生に対して、何を学ぶのか、何に取り組むのかという意識づけや、地域との関わりを持つためのマナーを指導する「事前教育の重要性」が強調されていたことである。本研究を進める上で、大変参考となる調査であった。

### 4. 地域交流の事例調査（地元で行われた課外自主活動団体と地域交流の実例）

#### （1）「立命の家」（主催：立命の家実行委員会）

「立命の家」とは、本学の理工系課外団体を中心に、日ごろの学習や研究の還元の一環として、小学生へ体験や学びの場を提供する企画イベントであり、今年は、2007年8月28日と29日に、BKCにおいて開催され、児童・保護者など40名が参加をした（表12）。

学生は、数カ月前から「立命の家実行委員会」を組織し、各団体より実行委員を派遣して、全体の企画検討を始めている。また、それぞれの参加する課外団体においても、開催当日までの間、諸準備を行っている。

「立命の家」は、理工系課外団体が自分たちで企画・運営し、地域貢献を行うという、BKCの特徴を活かしたものであることと、児童や保護者との交流を通じての学生の成長の機会として、非常に貴重な場となっている。

参加した児童、保護者へのアンケートでは、楽しんだことへのお礼や、来年も参加したいというコメントも見

表12 2007年度「立命の家」企画概要

1日目（8/28）	2日目（8/29）
①飛行機研究会 ペーパーグライダー製作と飛距離競争	①EV-Racing（ソーラーカーサークル） 模型ソーラーカーの組み立てと試走（ミニ四駆）
②E.S.S. [英語研究会] 英単語カードの作成とそれを使ったカードゲーム	②R.C.C.（コンピュータークラブ） Flashを使いアニメをWeb上で動かす
③ロボット技術研究会 2chリモコンとモーターによる紙コップロボット	③草津天文研究会 プラネタリウム鑑賞と傘を使った星座表の作成

受けられた。

（2）志津南小学校「志津南小プログラム」

①今回の概要

同校が、「保護者や地域に学校を公開し、学校の取り組みの現状を知ってもらい、学校の協力体制を築くための基盤作り」を目的に、今年度は「科学と文化と子供たち、そして地域との出会い」をテーマに、10月25日から5日間にわたり開催された。このうち、10月29日の午後3時より4時まで行われた「クラブ活動公開」に本学の課外団体が参加し、小学校4年生以上の88名がグループにわかれ、大学生27名と交流を行った（表13）。

このプログラムへ参加することとなった経緯は、本学学生オフィス職員が同校へヒアリングに行き、その後同校より相談があったことがきっかけで取り組みを開始し、参加できる課外団体の選定や小学校とのコーディネートを行った。

②志津南小学校長へのインタビュー

当日、このプログラム終了後に同校校長へのインタビ

ューを行った（表14）。

前述した小学校へのヒアリング調査の結果を裏付けるようなコメントもあった。

5. 調査報告から見える現状と課題

これまで実施した諸調査の結果から、次のような現状と課題が見えてきた。

（1）学生・課外団体

学生にとっては、地域交流を行うことについて、また、小学校で児童と交流することは、自分を見つめ成長する貴重な経験の場であり、団体の活動の普及・広報や団体の団結力にもつながるため、積極的な意識を持っていることが明確になった。さらに、学生たちは、児童へ伝えるコミュニケーション力やプレゼンテーション力などのスキルアップが必要と認識している。

そのため、他大学調査でも重要視されていた「事前教育」として、これらの能力をスキルアップできるカリキ

表13 「志津南小プログラム」企画概要（2007年度）

参加した課外団体	内容	学生	児童	教員
立命館コンピュータークラブ	3Dの風景画の作成	5	17	2
飛行機研究会	模型飛行機の製作	7	19	3
エルベトゥ（サッカーサークル）	サッカーの練習・試合	9	35	2
Fusion Of Gambit（ダブルダッチ）	ダブルダッチ（なわとび）	6	17	2

表14 志津南小学校・校長の感想・コメント

感想・コメント
①校長として4月に着任以来、児童の無気力さを気にしていたが、今日は児童が生き生きしていた。
②クラブ活動は、小学校としてもっとも手薄な部分であり、どのような形であれ、手伝ってもらえることは、小学校として歓迎である。
③児童へは、単なる「経験」だけではなくて、目標の設定とそれに向けての努力の場としてほしい。
④クラブ活動を運営するためには、専門的な知識と「児童に負けない」パワーが必要。「学生の力」が求められている。



表15 コーディネートの上で想定される小学校との交流パターン

パターン	内 容	団体数など	期 間
1	児童クラブへの指導 ※分野指定がある場合	特定の課外団体	単発・継続可
2	児童クラブへの指導 ※さまざまな団体の交流・指導	Ritsパッケージプログラムの提供 (各週で団体を変えての派遣)	一定期間 (例：1学期の間)
3	小学校で行われる体験プログラムへの派遣・ 交流	特定の課外団体 希望によって複数の団体	単発 ※大学が会場でも可

ュラムとともに、地域への貢献や安全への対応などが習得できる内容を織り込んだ研修が必要と思われる。

また、小学校との「継続的な交流」についても好意的に捉えている学生が多かった。このことは、例えば、半年ないし1学期間に隔週程度行われる児童クラブの時間帯へ派遣・交流ができる可能性を示しているため、今後の交流が期待できる団体の参考としたい。

#### (2) 小学校の現状

前述の調査結果でも示したが、今回は、小学校や教員の児童クラブに関わる現状が把握できたとともに、児童クラブに限らず、大学・学生との交流ニーズはとても高いことがわかった。可能ならば、学生による、専門性の高い、児童に目標を持たせることができる交流が望まれている。

#### (3) コーディネート業務の重要性

今回、学生オフィスの職員が行ったコーディネート業務は、①小学校側の希望を聞きながら、複数の課外団体を選定すること、②小学校教員との取次ぎなど学外者との折衝、③学生に対するこのプログラムの目的や内容の伝達、時間調整、準備の進捗管理など、があり、種々起こる課題に対する解決能力や渉外力、また、団体への企画に対する提案や助言などが必要とされた。この「志津南小プログラム」のような交流プログラムの実現にあたっては、日常、学生オフィスで業務として行われる地域交流の取次ぎとは異質であるため、あらためてコーディネート業務の重要性を認識できた。

これは、本研究の目的である「地域交流プログラム・コーディネーターの養成」において、学生の育成のための「教材」として、可能性があると考えられる。

#### (4) その他

地元自治体の連携と支援、ならびに、児童との交流を積極的に進めようとする学生や団体へのインセンティブの付与について、検討をする必要がある。

## V 政策立案について

### 1. 「地域交流事前研修プログラム」の提案

これまでの調査結果に基づき、小学校での児童との交流に臨む課外団体へ、事前にレクチャーするプログラムを、以下のとおり提案する。(表16)。

設計に当たっての視点は、(1) 地域交流・地域貢献を行うことの意義を明確に伝える、(2) 実績からみた課題に基づく、学生のスキルアップにつながるカリキュラム、(3) 小学校の現状や安全、モラルについての講義の導入、(4) 課外団体が受講しやすい極力シンプルな構成とした。

### 2. 「地域交流コーディネーター養成プログラム」(表17)

小学校で繰り返し行われる児童クラブや放課後の企画を、それぞれの課外団体と、小学校、地元自治体や団体とを取り次ぐ役割とした「地域交流コーディネーター」の養成については、必要なマナー、渉外力、いろいろな交流形態の提案・企画力や、課題に対する解決能力を養い、自立的・創造的で社会に貢献できる人材の育成を目指す。

## VI 研究のまとめ

### 1. 豊かな人間性を持った児童の育成

小学校の授業の枠組みの中で繰り返し行われている児童クラブは、生きる力や主体的に取り組む「総合的な学習の時間」の一環として、各小学校に色々なクラブが設けられている。

しかし、スポーツ系・文化系を問わず数多くの児童クラブがあるが、小学校の教員はそれらの専門性を必ずしも備えているわけではない。また、事前の準備はもとより、クラブでの指導を行うには体制的にも時間的にも限

表16 【地域交流事前研修プログラム】想定するプログラムのイメージ

	講義名	講師
1	立命館大学びわこ・くさつキャンパスの成り立ち／地域交流の意義	学生部
2	交流にあたっての心構え／応急処置・救急救命の基礎知識	学生部
3	小学生との接し方／小学校の児童クラブの現状／ハラスメントを防止するには	小学校教員
4	ビジネスマナー	外部講師
5	プレゼンテーション研修	学内講師
6	カウンセリング研修	学生サポートルーム

表17 【地域交流コーディネーター】想定するプログラムのイメージ

	講義名	講師
1	立命館大学びわこ・くさつキャンパスの成り立ち／地域交流の意義	学生部長、学生オフィス
2	交流にあたっての心構え／地域交流業務全般の説明	学生部長、学生オフィス
3	小学生との接し方／小学校の児童クラブの現状	小学校教員
4	ビジネスマナー	外部講師
5	プレゼンテーション研修	学内講師
6	(コーディネート業務「地域へ飛び出せ」)	学生オフィス

りがあり、かなりの精神的・肉体的な負担になっていることが予想される。

純真で感受性豊かな、そして大変大きな可能性を秘めたこの「児童」の時期は、人生の導入期とも言える時期である。児童の豊かな個性を育む上で、さまざまなものを見聞し体験する場を与えることは、児童の成長に大きく影響する。そのような貴重な場面に、全国トップレベルの競技水準、もしくは、非常に高い専門知識や技術を携えた、若くてエネルギッシュな大学生が小学校で交流を行うことは、児童には刺激的であり、将来の無限の可能性を発現させる、かけがえのない機会となる。

そこで、小学校の児童クラブや放課後クラブに、本学の課外団体が組織的にクラブの指導を行うことにより、児童への学習支援・知識の供与、文化・スポーツ体験、異年齢交流の実現や、安心・安全な環境の提供など、学生たちがクラブを通じて児童と交流をすることは、大変意義深い。

## 2. 学生の成長

立命館大学大学行政研究・研修センター紀要『大学行政研究』創刊号所収の中上品代「課外活動の教育的役割の検証——正課プログラム化に関わる研究」で述べられたとおり、2002年度に「BKC正課・課外活性化委員会」による調査・分析から、学生の実感・体験には「伸びる

瞬間」というものが存在することが明らかとなっている（表18）。

小学校の児童クラブにおいて、課外団体の学生が自分たちの活動を活かして児童との交流・指導を行うことは、責任ある立場を経験したり、考え悩み、落ち込んだり、人に喜ばれたりする体験をする、学生の人間の成長につながるフィールドとなりえよう。

表18

### 学生が感じる「伸びる瞬間」

- ①責任ある立場（厳しく緊張感のある場）を経験した時
- ②目標を持った時、達成した時
- ③考え悩み・落ち込んだ時
- ④やり遂げた時・完成させた時
- ⑤人に喜ばれた時、活動が評価された時
- ⑥勝った時、負けた時
- ⑦刺激（協力・競争）しあえる仲間（先輩・後輩含む）、優秀な人材に出会った時
- ⑧他分野（学部・学科・社会）の団体や個人と接した時
- ⑨尊敬できる教員に出会った時、顔を覚えてもらった時
- ⑩学ぶ必要性を理解した時

出典：2003年「BKC正課・課外活性化委員会答申」

### 3. 立命館大学学生部の課外プログラムづくりの意義

本研究では、課外団体への支援、コーディネーターとなる学生スタッフの育成、地元小学校へのヒアリング調査から具体的な実施に至るまで、学生部職員が作り上げるものである。

これらの取り組みは、学生部職員の業務には従来なかった範疇のもので、さらなる力量向上の好機であるとともに、学生部では初めての課外プログラムの開設となるため、新たな学生支援業務としても意義のあるものとなる。

## VII 残された課題

### 1. プログラム案のブラッシュアップと試行

前述のプログラム提案から、学生の成長により有効なプログラム化を進める必要がある。

#### (1) 教学部との連携

産業社会学部やボランティアセンター、インターンシップオフィスなどが開講している講義など、本プログラムの趣旨・目的に合う有効なカリキュラムの導入の相談や検討を進めるにあたり、教学部との連携を図る。

#### (2) プログラム案の試行

プログラム案の作成後、児童との地域交流に積極的な課外団体を2団体程度選出し、プログラム案の試行を行った上、派遣終了後の評価を実施する。

### 2. 草津市との連携強化

本研究に関わるヒアリング調査により、地元の各小学校との個別の関係構築はスタートを切り、1日であるが派遣試行も実現ができた。今後、各小学校との交流へと拡大させるためには、草津市ならびに草津市教育委員会との連携強化は必須条件となってくる。地域や小学校の状況把握、各小学校への派遣に関わった取り交しの相談や、市の事業施策として立案するためのアプローチなどを、草津市との包括協定に基づいて具体化を進めたい。

### 3. インセンティブ付与の検討

本研究において行った他大学での調査結果で示したとおり、児童との地域交流に携わる学生に対しては、謝金や必要な活動費の確保がなされている。これらの報酬そのものが、学生たちの児童との交流に取り組む動機づけになっているわけでないとは推測するが、最低限に必要な

な経費の確保とともに、課外団体が地域交流に前向きに臨めるインセンティブのありようを検討する。

現在、本学では、地域交流を積極的に行っている課外団体への報奨的な支援制度を設けられていない。ついては、立命館大学父母教育後援会との連携による「地域交流アワード」（仮称）の創設の検討や、先行研究である、「大学と地域の連携事業モデルの研究」（紀要「大学行政研究」創刊号）で提案された「地域連携推進基金（仮称）」の開設提案を参考に、課外団体の地域交流実績に応じた支援制度の検討を行う。

### 4. 立命館アジア太平洋大学（APU）との連携の検討

APUでは、年々地域交流を積極的に進めており、継続的でユニークな交流の好例を作り出してきている。また、学生部では、APUと本学との課外活動における交流を支援しており、多くの課外団体がAPUの学生と活発に交流している。今後本研究によるプログラムに組み入れる可能性として、草津市内小学校の児童とさまざまな国際学生が所属するAPU学生団体との交流をBKCでプロデュースし実現できるよう、APU関係部課と連携し検討を進める。

## VIII 今後の計画

このテーマの実現については、2007年度中に「地域交流事前研修プログラム」、「地域交流コーディネーター」の両方のプログラム案を策定し、2008年度中の開講を目指す。そのために、2団体程度の派遣を行い、学生たちからの感想や意見に基づいて、プログラム内容の充実を目標としたい。

## IX おわりに

このプログラムに参画する学生に対し、取り組む意義などの動機づけやビジネスマナーなどの事前研修、プレゼンテーション研修などのカリキュラムの企画立案は重要不可欠である。現在の学生部では、この立案に専従できる教員・研究者が存在しないため、学生の成長に資する体系的なプログラム作成は大きな課題である。今後は、教学部との連携のもと、本学で推進されているインターンシップ制度での事前・事後研修や、学校インターンシップを参考にできる優位性は活用しつつ、学生部が内政

表19 【今後の研究計画】

年度	大学	小学校	課外自主活動団体（小学校への派遣）	地域交流コーディネーター、学生オフィス
2007	後期		2学期プログラム案のブラッシュアップ	プログラム案のブラッシュアップ（他部署との連携）
	春休み	3学期	プログラム化、児童クラブへの応募 派遣団体選定（2団体）	プログラム化 学生募集、草津市へのアプローチ
2008	前期	1学期	派遣団体への事前研修 団体の派遣・評価	事前研修試行 コーディネート開始（学生オフィス）
	夏休み	夏休み		報告会、今後の派遣企画の検討
	後期	2学期	団体派遣の本格化	団体派遣の本格化
	春休み	3学期		

的に調査・研究や企画立案が進められる、学生支援の学術研究や教育的アプローチの可能な専門的体制の構築も検討できればと考えている。

【参考文献】

- 1) 『地域協働合校』滋賀県草津市教育委員会 編、2007年3月
- 2) 「教育改革国民会議報告（抜粋）—教育を変える17の提案—」文部科学省、2000年12月
- 3) 中上品代、伊藤昭、伊藤則男、石岡清重「課外活動の教育的役割の検証—正課プログラム化に関わる研究—」『大学行政研究』創刊号、2006年3月
- 4) 勝山美菜子、渡部徹「課外団体への小学校・地域交流アンケート調査報告」立命館大学学生オフィス（BKC）、2007年

9月

- 5) 甲平誠之「草津市内小学校・ヒアリング調査結果報告書」立命館大学学生オフィス（BKC）、2007年9月
- 6) 「地域連携学校教育のできる教員養成 —地域に愛着を持ち地域に根ざした子どもを育成できる教員養成プロジェクト—」大阪教育大学地域連携学校教育企画委員会 編、2007年3月
- 7) 林堅太郎「地域連携が大学を活性化する」『大学時報』日本私立大学連盟、2006年7月
- 8) 大藪康成、伊藤昇、今村正治、森山哲朗「大学と地域の連携推進事業モデルの研究—地域に根ざした大学の新しい展開に向けて、立命館大学びわこ・くさつキャンパスを事例に—」『大学行政研究』2号、2007年3月

以上

## Creation of a system for exchange with elementary school students by means of extracurricular activity groups at Ritsumeikan University: Development of an advance training program for exchange with the local community and training local community exchange coordinators

KITABA, Shoei (Assistant Administrative Manager, Office of Student Affairs)

ITO, Akira (Senior Researcher, Research Center for Higher Education Administration)

MOTOMURA, Hiroshi (Deputy Managing Director, Division of Student Affairs)

OCHI, Yutaka (Administrative Manager, Office of Student Affairs)

### Keywords

Student support, local community exchanges, elementary schools, extracurricular programs, extracurricular activity groups, community exchange coordinators

### Summary

Students and groups at Ritsumeikan University who participate in independent extracurricular activities will develop an Advance Training Program for Community Exchange to acquire the skills required for planning and participating in children's clubs at elementary schools, including communication and presentation abilities as well as knowledge about school safety and other relevant issues.

Student staffs are being trained as Community Exchange Coordinators, and will be responsible for taking up the needs of elementary schools and extracurricular activity groups and for implementing exchange activities. The program is fostering the good manners, liaison abilities, planning abilities, and problem-solving abilities required for mediating between extramural organizations, such as elementary schools and local authorities, and extracurricular groups, with the aim of nurturing human resources capable of contributing to society in an independent, creative manner.

Our objective is to develop a sustainable extracurricular program that will enable students to mature and contribute to society, as a new form of student support by way of community exchanges and contributions to the community carried out by student organizations.

